

Editorial

2016年の「早期緩和ケアの正体」、2017年の「最期の最後のがん診療」、そして本号「緩和ケア実践マニュアル Start up & Beyond PEACE」にて、小誌緩和ケア三部作は取りあえず完結です。そのなかでも今回は小誌には珍しく(?)ぐっと実践寄りの特集です。PEACEプログラムと専門的緩和ケアの間に置かれる知識やスキルを整理した、とえばよりイメージされやすいでしょうか。日々の臨床のなかで要請される緩和スキルを誰もが完璧に身につけているわけではありません。そんな読者の一助になれば……と願っています。

三部作といっても意図してそうだったわけではありません。創刊以来追ってきたからこそ余計にそう感じてしまうバイアスを抜きにしても、ここ数年のがん領域では、免疫療法と同程度の存在感が、この早期緩和ケアとアドバンス・ケア・プランニング(ACP)にはあったように思います。それにしてもなぜこのテーマにここまで惹きつけられたのか。完全に記憶頼りのため偽史的な話になると思いますが、そのことについて少し考えてみたいと思います。

初めて早期緩和ケアという言葉聞いたのは2012年頃だったと記憶しています。Temelの論文が2010年ですから、かなり遅れて知ったことになりますがあれは誰から聞いたのか……。営業として仕事をしていた緩和医療学会場だったような気もしますが、同時多発的に複数の場で耳に入ってきたような印象が残っています。とはいえ、「がん患者に早くから関わるだけでOSが改善する」という触れ込みに、ぐっと体がもっていかれるような感覚があったこと、そのケアのあり方自体になにか確信のようなものを抱いたのは間違いありません。

当時はまだSNSもステレオタイプな物言いですが牧歌的だったように思います。ただし、インターネットが日常生活の主演になりつつあるような頃でした。なんと言ってもFacebookです。メールでも電話でも直接対話でもなく、Facebookで仕事のタネができ、そのままやり取りをして、企画実現というプロセスが日常になりつつあり、私もそんな経緯でいくつか仕事の実現しました。あのときの奇妙な負担感と中抜きされたような拍子抜けの感じは忘れられません(いまではすっかり違和感なくなりましたが)。そんなこれまでとは全く違った身体性に基づいたコミュニケーションが日常に入ってきたせいか、コミュニケーションのあり方について考えるようになっていたのだと思います。

とはいえ、SNSでの体験もそうですが、思考面では直接的なもう一つ理由があります。2012年という、一橋大学佐野書院で國分功一郎先生と熊谷晋一郎先生による連続セミ

ナーが開催されていた頃です。営業スタッフとして半分仕事、半分(いや、それ以上に)個人的関心というスタンスで毎回通っていました。大きな集まりではありませんでしたが、そのときのディスカッションや議論をベースとして、のちに『中動態の世界』が書かれていくことになります。ひととひとのかかわりとそれ自体によって生じてしまう苦しみ、かかわり以前の様相について、自閉症や依存症を蝶番として議論されていたこの会には、時折疑念を抱きつつも深く魅了されていました(『中動態の世界』冒頭に置かれている依存症の話はまさにこの佐野書院での会が最初だったはずです)。

それともう一つ、当時の自分の仕事からの影響があります。出版社の営業という仕事は、それ自体かなりオールドスクールな側面があります。諸先輩方への礼儀や挨拶、懇親会という名の飲み会(とそこでのお作法)、対面での書店担当者への新刊プロモーションと発注書の手渡し……。そんな強烈な、タテ社会的人間関係を大前提とした仕事です。日常業務でも電話とファクスがフル活用されている業界というのは化石的と言っても言い過ぎではないでしょう。しかし一方でこの直接的な関係が結ばれたときの仕事の進み方と成功体験は、また別種の体験でした。会って話すとこんなに面白いのか。発見と感動の仕事です。他人と関わるに際して儀礼や作法が何より重んじられる世界と、それらがあらかじめ存在しないような世界での仕事、そして「かかわることそれ自体が困難なひとたち」の世界で考えられる事柄。そんないくつかの要素が絡み合い、「かかわること」への興味が「死から逃れない人間にただ関わるだけでなにかが起きる」ということに確信を抱かせ、その正体を知りたくなったのだと思います。

そこから振り返れば、思想と枠組みを知り(早期緩和ケアの正体)、終末期のコミュニケーションについての臨床を整理し(最期の最後のがん診療)、その二つを経て初めて具体的で実践的な特集を届けることができるようになったということなのかもしれません(しかしこれは編集者として効率が悪すぎです……)。

全三部作に唯一ご執筆いただいたのは井田病院の西智弘先生です。先生には企画のみならず多大な貢献をいただきました。そして今回の企画はなによりも吉田健史先生の言い尽くせないご助力のおかげです。執筆者の方々へのお礼も含めて、あらためて感謝を申し上げます。

「Cancer Board Square」編集室 三橋